

君は詩人を見た事があるか

キマダヒフミ

## 人間には言えない真理

みんな、楽しそうだな、と

ふと思う事がある

そんな時、僕はくしゃみをする

したくなくても、わざと

ふと、僕は

十年後の事を考える

すると、それは永遠先の未来のように感じる

十年も持ちこたえられものが

今の世にいくつあるだろうか？

馬鹿馬鹿しい事だが

友人と名乗る者や恋人と名乗る人と

僕は駅でたまたますれちがう人のように出会う

僕もかつては誰かの親友や恋人を気取ったものだが

今は、何だか仮面舞踏会に出ているような気分

祭りが終わればみんな解散で

そうして、その終末はすぐに来ている

・・・そんなことばかり書いている僕

何故、自殺しないの？と人に問われれば、

死に損なったのさ、と逃げ口上を垂れるばかり

それでもしつこく食らいついてくるなら

僕同様に死ねない絶望を味わうべきかも

全てが終わるなら

全てもまた始まるだろう

僕はいつだって、人々が終末を見るときに

希望を見出してきたはずだ

もちろん、その逆の事も

これまでに多々あったんだけど

そうして

そうして

朝日の中で

僕は何を言えばいいかわからず

変わらず変転し続ける太陽に向かって

人間には言えない真理を

吐露したんだ

## 神のコーラ

中年女はふと、

鏡の中に昔の自分が映っている事を願った

駅前でピラを配っている男は

トイレで小水の切れが悪くなった事を嘆いた

若年の我々は

ただ、老後を心配して日を過ごした

そして、死の間際の老人は

なぜだか、幸福そうであった

それを見ていた神は

何だか泣きたい気持ちになってしまったが

彼はそれをぐっところえて

手近のコーラをぐっと飲み干した

## 雨に煙る校庭

私は小学校の校庭を思い出す

雨に煙るその校庭を・・・

その光景に、私は写っていない

その光景に初恋のあの子は写っていない

その光景に、一番怖かったあの先生は写っていない

でも、その校庭には雨が煙っている

誰もいないけれど、雨が煙っている

そこが取り壊されて、駐車場になった後も

その駐車場が雑居ビルになった後も

そこにはやっぱりその校庭があって

そして、そこにはやっぱり雨が煙っている

そして、私は少しの間

架空の小学生となって、そこで遊ぶのだ

## 耳の欠けた神

透明な僕らは一体

どこへと行くのか

透明な彼らは一体

どこへと消えるのか

誰もが両手を出して

銅貨を求めている

だが、その顔は王のようで

しごく、威張り腐っている

今、君が顔を背けたものが

やがて、君を打ち倒すだろうと

王宮魔術師は告げる

だが、彼はすぐに磔にかかり

全てはなかった事に・・・

人々の自足した顔の裏側に

無限の穴ぼこがあって

時々、僕はそこを泳ぐんだ

何ものも身に着けていないから誰よりも自由なんだと

少しだけ信じながら

それでも、僕も少し寂しくなって

人恋しくなると、僕はすなわち

手近の誰かにメールを送り、電話をかける

・・・でも、それは僕の求めている人ではない

だから、僕は迷惑なやつ

おかげで僕は夜中に一人酒を飲む事しかできない人間になってしまった

誰のせいでもない 僕のせいだ・・・

そんな時・・・そして、そんな事をわざわざこうして

詩に書き写してしまう時、僕は

自分の内部に耳の欠けた神が見える事がある

そいつは老人のように何かをわめているが

僕の耳には決して聞こえない

でも、そいつが必死に何かを喋れば

それだけで僕の寂しさも紛れるんだ

そして夜は更けて

やがて雪が降り出す

雪は僕の上にも神の上にも

平等に降りかかるはずだ



## 「カラスのいる麦畑」の前で

僕の目の前に

ゴッホの「カラスのいる麦畑」の絵がある

それはまるで子供の描いた絵のように僕の前に掛かっているが

それは同時に子供には決して描けないものも含んでいる

それは嵐の前の晩のように

何かの予兆をはらんでいて

希望とも絶望ともつかない

二十世紀へ突入する現実を

映し出しているかのよう

僕の目の前に

ゴッホの「カラスのいる麦畑」の絵がある

それは人々がこの絵に対して無限に費やしてきたともいえる

沢山の言葉達をはねのけて

まるでまっさらな処女の少女のように

僕の目の前にこうして掛かっている

僕はそれを見て、一人でこうしてここで生きている

絵の奥に続く世界を

現実という拙劣な一枚の絵の中から

想像しながら

## 沈黙と言葉

沈黙は木のようにそこにある

人が美に感動した時

恋に心奪われた時

どうして、言葉が介入する余地があるのか

沈黙ができなければ

その空白は饒舌で埋める他ない

だから、誰もが語る

自分の事 他人の事 世界の事

でも、それは木ではない 花ではない

花の美しさを語る事は断じて

一輪の花ではない

だが、何故だろうか

今、僕の暗闇の静寂に

沈黙が舞い降りてくる時

それを僕が言葉で語りたいと願う事は

## 夢に還る

お前は

少しずつ消え失せていく

この宇宙で

誰にも存在されなかった事として

お前は少しずつ死んでいく

お前に比べれば

まだあの無残なヤモリや

あの無機質な隕石の方が

遥かに自らを全うしたに違いない

今、お前はそこで

少しずつ朽ち果てていく

誰に愛される事もなく

誰をも愛した事もなく

お前はそこでそうやって

少しずつ消えていく

まず、足から そして手

次に下半身 そして胴の部分

そして、目だけが最後に残る

最後の最後までこの世界を見続ける為に

今、お前はそうやって

少しずつ消失していく

誰からも顧みられる事のなかった人生

誰をも見送りはしなかった

自分を愛する事も他人を憎む事も

そして、その逆も一切なかった人生

・・・ただ、小銭を稼いで そして

適当な範囲を越えた生理的快楽と「夢」と名付けられた無数の妄想で彩られた人生

それらは、ただもう存在すらしない無駄物だった

今、それらが、この地に帰ろうとしている

さあ、ここだ 僕はここで

大地に立って何を想うか？

無から無へと消えていく無常の者として

お前は一体、何を思うのか？

すると、地面の底からニョッと手が伸びて僕の足首を掴み

そうして僕のゾンビが土から出てきた

僕は慌てて、そいつの顔面を踏みつけ

泣き叫びながら逃げ帰った

・・・目が覚めると朝だった

「夢オチ」とは最もやってはいけない物語の締めくくりらしいが

僕のそれは違う

夢がオチではなく

現実というのが一つの「夢オチ」だった

だから、僕は今、現実に帰ってきた

真実に一番近い夢から遠く離れて

そして小鳥の歌いだしに合わせて歯を磨くと

僕の中から何かが消失していく音が聞こえた

それはシュウウという音で

何かの効果音のようだった

その日、僕は会社に遅刻した

それでも、僕は平気だった

そうして、僕は今でも夢を見る

現実という妄想の中で 一人

## 「自分」への問い

未来は今、影を落としている

光の中で、誰かが囁いている

私は孤独の中に安住している

人々は埋没する事に慣れている

銅鑼が一つ鳴れば、俺の魂は

駆け出すだろう まるで虎のように

人々の哄笑は今や、俺には

中学時代の思い出のよう

・・・そう、あの頃、初恋の人がいて

僕は「僕」だった・・・

光が影を落として

未来が歩き出す

後ろ向きに前進する事も可能なのだ

太陽と月が交互に昇るように、と

俺達の過去の亡霊たちが

俺達の中の魂に囁き続ける

何かが終わる時、何かが始まって

見まいとしたものもやっぱり、そこに存在し

だからこそ、宇宙も美も精神も

おそらく人間の意志を乗り越えるなにものかとして

そこに厳然と立っている事となるのだろう・・・

人々の尺度に合わせて

自分を切り取る人生はもういない

俺は世界から大きくはみだすつもりだから

世界の方で俺を勝手に

矮小化してくれるはずだ

今宵もこうして月が昇り

どこかで絶滅したはずのコヨーテが

最後の遠吠えをし

俺の魂は天上近く

ゼウスの目の前で破裂した

何かが終わる時、何かが始まるのだ、と

知っている誰かが僕に忠告したとしても

もう既に走り出している人間には

何も聞こえないはずだ

一陣の風になりながら 僕は考える

「自分とは何なのか？」と



## 顔と体

さよならを言う前には

言葉は消えて欲しい

誰かと愛撫する時には

言葉は消えて欲しい

その時には、音楽が鳴っていて欲しい

その時の情景にあった

巧みなやつを

・・・今更、何も言う事はない

僕は人生に疲れたんだ

「人生に希望を持て！」と

連呼する連中のお陰で

今、鏡を見て、そこに写っているのは

僕の顔ではない

誰か、別の他人の顔だ それは

そして僕の本当の顔は今も

どこか遠い暗闇をさまよって

僕の本当の体を捜しているのだ

## 前進

詩神よ 降りてこい

この世界の孤独を一人占めにするために

神よ 俺の為に歌を歌え

今、俺のしわがれた声の代わりに 神よ

お前の盛大な歌を私の耳に響かせよ

言葉を道具にすれば どこまでもいけるが

そこが天国とは決まっていない

酸素のない火星か、それとも地獄か

それは俺にも決められないのだが

衣食住にことかかず 酸素と人間がしこたまある

ここよりはずっといい所に違いない

地球は住むためにあるのではない

帰るためにあるんだ

俺の歌は宇宙に響く

お前達、地球の幼子を置き去りにして

君達は大きくなれば

私の歌の意味がわかるだろう

そしてそれは大海のように まだ見ぬ母のように

安らかで優しく 君達の耳元に

真の愛を伝く事だろう

今、この空を見よ

今、この海を見よ

全てが数値づけられ レッテルを貼られた

あらゆる鳥類達、全ての生物達をもう一度見よ

見よ！・・・彼らは今

あらゆるレッテルを剥がしながら

前進しようとしている

君が後退しようとしているとは正反対に

君が観念の虜になっているのとは反対に

彼らは生命として今を生き 前進しようとする

だとするならば、私達が前進できないはずはない

私は前進する

地球の子達に判別できる

足跡を一つも残さずに

## 君は詩人を見た事があるか

生きる希望もなければ

死ぬ絶望もない

絶望と希望を剥奪された男は

一体、どんな言葉を綴るのか

気になるなら、君は窓の外を見たまえ

そこに歩いているごく平凡そうな暗い顔の男が 即ち僕だ

あらゆる人間に対して他人のような表情をしているが

魂は赤銅のように真っ赤に燃えて

何かを叫びたがっているのだ

他人からはただの暗い男としか見えないが

そいつの魂はおそらく天国へ行こうとしている

あらゆる地上の地獄を突き破って

それでも、そいつに語る言葉はないので

全ては詩として、ここに叩きつけられるだけなのだ

君は詩人の姿を一度でも

見た事があるのか？

q

<http://p.booklog.jp/book/70661>

著者：ヤマダヒフミ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yamadahifumi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/70661>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/70661>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ